野村生涯教育だより

No. 429

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

(公財)野村生涯教育センターの
シンボルマーク
[n] は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 創立 59 周年を迎えて
● 行事を通しての自己教育
幼児教育部
● グリーティングカード

創立五十九周年を迎えて

三月四日（木）、当センターは創立五十九周年を迎えた。

昨年は新型コロナウイルスにより、世界中が不安に陥り混乱した一年となり、当センターの活動も、毎月全国のリーダーが集う全国講座はオンラインで各地を繋いで行い、各支部・連絡所の講座・勉強会は各地域の状況を踏まえながら継続してきた。

年明けには、二度目の緊急事態宣言の発出により、特に首都圏や関西圏では、さらなる活動の自粛、縮小を余儀なくされる状況が続いた。

二月下旬、緊急事態宣言後は減少傾向にあった感染者数が下げ止まり、さらには変異ウイルスの感染も増加という社会状況から、金子由美子理事長はじめ当センター本部は、三月四日の創立記念式が行えるかどうか苦慮していた。受講生には高齢層のメンバーが多いこと、そして、感染症対応による医療現場のひっ迫が続いていることを踏まえ、一都三県では宣言解除されていないなか、東京の本部をメイン会場にオンラインで行う予定だった三月の全国講座生勉強会と創立記念式は断念する決定に至った。

各地の受講生からは「創立記念日を創立の精神を繋ぐためにも祝いたい」との多くの希望が寄せられた。金子理事長はその思いを受け止め、それぞれの地域で感染状況をみながら自主的に創立記念日を祝うことを提案し、全国講座生全員に思いを込めた『創立五十九周年記念日に向けて』という書簡を送った。

当日、一都三県の受講生は、各々が金子理事長からの書簡を読み、思いを受け止めて創立記念日を祝い、他の地域は、全国十七箇所で十五支部、六連絡所が創立記念日を祝う会を行った。各々が主体的にプログラムを考え「野村生涯教育センターのあゆみ」、「創立五十周年記念式典・祝賀会」などのＤＶＤを上映。そして、参加者が金子理事長の書簡から感じ取った思いを中心に、活発な発言が続いた。

その一部を紹介する。

研修・地域担当　Ｓさん「学ぶなかで真実を感じ、命の繋がりや親の大事さ、そして夫婦が分かり合い繋がることといった、人の繋がりの大事さを学び、そのなかで子どもも育ち、その価値を感じ取っている。そうした、時代は変わっても変わらない大事なものを価値とする、その精神を研修・地域担当の役を通して地域のメンバーと真剣に次世代に渡すことを課題にしたいと思った」

兵庫支部　責任者Ｔさん「理事長の書簡を読むなかで、〝家族にセンターの自己教育の大事さを渡したいと思っているのか〟ということを話し合った。そのなかで若い人たちのなかには、日頃、夫婦、家族を基盤に学んでいても、現実には家族と共にという発想がないこと、さらに自分の意識が家族に大きく影響することの繋がりが見えていないことがわかった。しかし、若い人たちはとても素直で、わかるときちんと受け止める。書簡で『社会の激変のなかで、世代間の感覚が大きく変わっていること、そして、その背景をもっと深く知ること』の大事さを仰られた。その思いを受けて、私たちがこの社会をつくってきたこと、そのなかで今の若い世代を育ててきたことを自分の問題として、本当に自分本位の視点を変えて、もっと慎重に若い人たちの背景も踏まえて理解する努力をしないと次世代に繋げられないと感じた。このことを創立五十九周年の収穫にして、実践していきたいと思った」

福岡連絡所　責任者Ｋさん「書簡で『家族の悩みや思いを理解する努力をしているかどうか、そういった意識が自分の人間性を啓くのです』という一文に身の縮む思いがした。次女との関係がこじれたままで、なかなか話ができずにいたが、研修・地域担当に何度も関わりをいただき、やっ

と次女と話すことができた。すると次女が私にわかってくれないと嘆いていた原因が、私が思っていた原因とまったく違うことだったとわかり驚いた。理事長の書簡を読むうちに皆さんに自分のことを教えてもらいたいと思えた。皆が親子関係、娘との関係を通して話してくれて、少しずつ次女の気持ちに寄り添えていくのを感じ、私は向き合い、わかり合う努力を避けていたとふり返ることができた。仲間ともわかり合う努力をして気持ちを理解していきたいと思った」

静岡支部　責任者Sさん「学び始めは、私には問題ないと自分の在り方に疑問はなかったが、先輩が心配してくださり学ぶことを強く勧めてもらってきた。仕事ばかりに忙しくする夫に、私は一人で子育てをしている気持ちになり夫を批判していた。しかし、関わりをいただきながら、夫が私のことを理解し、協力してくれてきたことに気づかせてもらい、夫の見方が変わってきた。今、夫の仕事を息子が受け継ぐことになり幸せをいただいている。ようやく自分の気持ちを見ることの大事さがわかり、道理に基づいて自分を知ることの大切さを学んだ。理事長の書簡で今を生きる次世代を憂うお気持ちを受け、次世代に繋げていくことを自分の人間性を啓き出す課題にしていきたいと願いを持った」

広島支部　責任者Iさん「理事長の書簡にあった『私たちは、この学びがなかったらどうだったか、学んでからどう変わったか』の投げかけから、諸先輩に思いをかけてもらい、引っ張ってもらってきたことをふり返り、自分も関わりをいただき今があるのだとの思いに至った。参加者全員がそれぞれふり返り、これまで以上に社会に呼びかけ次世代に繋げていきたいという意識を持てた」

宮城支部　責任者Tさん「理事長の書簡で『来年法人として六十年を迎えることになり、私たちはその六十年を継承できるかも知れないところまできている。この間の変化が激しい社会にあってその六十年の積み重ねはとても重く、そして六十年を繋ぐことの厳しさ、未来に向けての構えを持つこと』の大事さを仰っていた。私は夫が白血病に罹り、還暦を迎えることが、生きる上でどれだけ厳しいかを知ったことを思い出した。今、メンバーと関わるなかで、続いて書かれていた『情だけでなく道理に基づき、自分の課題として、相手の姿を自分に見て人間性を啓き出し、自己中心性を取っていく』ことに努力し、次世代に繋げていきたいと思った」

山梨支部　副責任者Tさん「学んでから自分がどう変わったかをふり返り、三十六年前、娘が荒れていたことから学び始め『親が変われば子どもも変わる』と教わったことを思い出した。『あなたの夫に対しての気持ちはどうか？』と大先輩から問われ、娘の奔放な振る舞いが問題と思っていたが、私が夫の言うことを聞かず自分のやりたいようにやっている個性が見えてきて、私の問題なのだと気づけた。自分を変えるのは大変だったが実践するうちに夫婦の関係が変わり、娘も落ち着いていったことを思い返した」

支部として集うことを自粛した地域の受講生からは、それぞれが理事長の書簡を読み、感想が寄せられた。

千葉支部　Hさん「『未来を作る子どもや若者にどれだけの意識があるのか』という問いかけは胸に突き刺さった。学んでいなければ、安心感を得られず、評価、結果に右往左往していたと思う。コロナ禍の厳しい社会で夫や子どもたちが過ごしている。『情だけでなく、道理に基づいて』とあり、野村生涯教育論を真剣に学び、家庭のことだけでなく、社会に起こることを自分の課題とし、子どもたちが明るい未来を歩めるように意識して学んでいきたいと思った」

青年部　副責任者Mさん「今、青年部で若者と直接関わる機会を持たせてもらっているので、若者がコロナ禍で、制約のある学校生活を送るなか、どんなことを感じ、

思っているかを聞かせてもらい、先輩からしてきてもらったように自分も心をかけていきたいと思った」

講座生たちは、全員が一堂に会して創立記念日を祝うことができなかったが、これまで、諸先輩からの関わりによって今があることをふり返り、足もとの家族や仲間との問題、また、社会、世界に起こることすべてを、この論に基づき、自己の課題とすることを確認した。そして、地球環境の問題、またコロナ禍で一人ひとり自分の命、生きざまを問われている時代を生きている自覚を持ち、自己の人間性を啓き、価値を社会に還元することを期した。

行事を通しての自己教育　幼児教育部

当センターでは教育ボランティア活動を推進し、その活動を通して出合うさまざまな条件を教育課題として、自分を知ることを主軸に相互教育を図っている。親子で学ぶ幼児教育部では、四季折々の伝統行事を母親たちが中心になり、子どもたちと一緒に行っている。

今年一月初旬、十一都府県を対象とした二度目の緊急事態宣言が出された。

本部事務局は東京近県在住のメンバーによって運営されるなか、この事態を踏まえ、時間短縮と三割の人数による運営を行っている。そして、毎週各部署がそれぞれの希望を出し、総務担当理事補佐が全体の調整を図り本部事務局の体制を取っている。幼児教育部も毎週末、東京と近県から通ってくるメンバーがそれぞれの地域の感染状況を踏まえ、夫婦で話し合い、自粛することを選択してきた。

毎日幼児部に来ているときは、親子で触れ合う条件を課題にし、話し合い、指導を受けるなかで自己教育をしているが、自粛中は家庭で過ごす時間が長くなるなかでのさまざまなことについて、電話やオンラインでの話し合いを行ってきた。

例年であれば、この時期に子どもたちが楽しみにしている親子で伝統文化に触れる機会となる『節分会』や『おひなまつり』がある。節分会は本部行事として、例年東京近県支部のメンバーが揃って行ってきた。しかし、今年はメンバーは集まらず本部と第二研修会館、そして野村佳子記念館の豆まきを通して厄払いを行うことにした。

そして幼児部の母親たちはこの状況下でセンターに行くことを自粛することにし、その上で『節分会』をどう考えたらよいかを話し合った。いつもなら、金子理事長の豆まきに幼児部の修了生がお供をする。修了生にとってそれは年長の自覚になる誇らしい時間となるが、それが叶わないだけに、何ができるか母親たちは一生懸命考えていった。斯くして〝子どもたちのために〟となっていく母親たちの意識に理事長から「一生懸命やっているようだけれど、何か軸になるものが欠けているように思います。子どもたちのことを考えるならば、それぞれの家庭で子どもにとっての大事なお父さんに意識がないように感じます」と助言があった。母親たちは、理事長の投げかけから話し合い、そうしたなかで改めて由来を調べた。豆まきは、一年の無病息災を願い一家の当主が行うことから、コロナ禍の今だからこそさせてもらいたいと考え、今年、幼児部としては六家族がオンラインで行うことにした。

そして、それぞれ柊鰯（ひいらぎいわし）を用意し、子どもたちに由来を話しながら自宅の玄関に飾った。今年度修了生のSちゃんは、焼いた鰯の匂いに「くさい！」と鼻をつまみ、五歳のRちゃんは「これなら鬼も逃げていくね」と話した。

その後、オンラインで繋がり、母親たちが由来を話し、紙芝居を行った。子どもたちは『豆まき』、『おにのパンツ』を元気に歌い、画面を通しての久々の再会を喜ん

だ。

その晩、それぞれの家庭で子どもたちは父親と一緒に豆まきをし、皆で元気であることを願った。

母親たちは、その後『おひなまつり』についても、桃の花、菜の花、菱餅にも一つひとつ意味があり、子どもの成長を願うという伝統行事に込められた願いを噛みしめ、オンラインで『おひなまつり』を行いたいと担当理事に伝えた。理事からは「理事長は、コロナ禍だから〝できない〟ではなく、〝何ができるか〟を考えることが大事だと仰っているでしょ。こういう時だから発想を転換してみない」と助言を受けた。母親たちは東京近県だけでなく全国講座に参加している各地の幼児部メンバーと繋がりたいという思いになり、今年のおひなまつりについて自分たちの考えをまとめていった。

母親たちはコロナ禍で今までのような形で行事ができないなかで、自分たちが考えるベースが「何をどうやるか」にあることがわかり、本来、なぜやるのか、その形になった動機は何か、自分たちの思いはどうなのか、そうしたことを道理に基づいて考えたときに相応しい形は何かに至ることを学んだ。

未来創造学としての生涯教育
野村生涯教育原論Ⅰ・Ⅱ
野村佳子著

ユネスコ推薦図書

日本語版

発行　**野村生涯教育センター**
発売　**出版文化社**

野村生涯教育原論Ⅰ・Ⅱ
特装版

四六判　267 頁
定価：2,500 円＋税

四六判　240 頁
定価：2,500 円＋税

特装版
A5 判　267 頁
定価：3,398 円＋税

特装版
A5 判　240 頁
定価：3,500 円＋税

※特装版の購入の際は当センターまでお問い合わせください。

グリーティングカード

季節のご挨拶を申し上げます

未だ出口の見えない新型コロナウイルス感染拡大という、かつてない災禍が世界を覆い一年が過ぎようとしております。私たちは今、未知のウイルスと、それをきっかけとしてより鮮明になった分断や格差の拡大など様々な問題に直面しています。

今年一年を通じ、そうした様々な影響下で犠牲になられた多くの人々に対し哀悼の意を表するとともに、命の大切さを改めて世界の皆様と共有したく思います。

私たちの住む社会が行き詰まりを呈する今、その社会を創り出してきたのは私たち人間であることの自覚に立ち、そして人間は自然界に生かされ、命あるすべてのものと共に生きていることに思いを致し、一人ひとりが自己中心性と向き合い、心・身・環境のバランスのとれた生き方に目覚めていくことの重要さを思います。

今できることを誠実に行うことが未来に繋がることを信じて、日々を過ごしてまいりたいと存じます。

皆様にとって、来年がよい年になりますようお祈り申し上げます。

（公財）野村生涯教育センター
理事長　金子由美子

Imperial Palace in spring

Meijijingu Gyoen in autumn

Season's Greetings

Dear Sirs,

Please allow me to personally send my warmest seasonal greetings to each and every one of you.

Sadly, with the spread of coronavirus infections, a year will soon have passed since the whole world was visited by this as-yet-unknown problem. We know not when it will end, and are faced by many issues including divisions and inequality that the virus has only served to deepen and underscore.

I would therefore also like to express my heartfelt condolences to the many who have been directly or indirectly impacted by this calamity. May this serve to remind us all, throughout the world, of the preciousness of life and of the important things that we share.

Now that the very societies in which we live have been gone down a blind alley, my hope is that we may use this as an opportunity to reawaken to the fact that it is us human beings that has made these societies.

Having profound consideration for nature that keeps us alive with all living creatures, I think it is important that we must face our self-centeredness and be awakened to a life striking a balance between mind, body and environment upon this recognition.

I am dedicated to the belief that doing with our whole heart what can be done this very day is an investment in our future. May we all do our best.

I sincerely pray that the New Year will be fruitful for you all.

Ever yours,

金子由美子

Yumiko Kaneko
Director General
Nomura Center for Lifelong Integrated Education

Rice Field in Gyoda City in early summer

Mt. Fuji in winter from Zushi Beach

春　令和二年の新年を迎えて。皇居二重橋
秋　センター本部近くの明治神宮御苑の紅葉
夏　行田市にある古墳を囲む穏やかな田んぼの風景
冬　相模湾から見る冠雪の富士

当センターは新型コロナウイルス感染拡大による国際郵便への影響、また政府、東京都の外出自粛要請を踏まえた事務局運営縮小などの状況から、海外ネットワーク向けに発送してきた英文機関紙『ノムラセンターニューズ』をデジタル版としてホームページに掲載している。昨年末、新しい年を迎えるにあたり、金子理事長の〝季節のご挨拶〟のカードについてもデジタル版にて世界各国のネットワークの方々、国連、ユネスコ、駐日の各国大使に送付した。

これまでのように家族が一堂に会することもままならない世界中の方々に、日本の四季の自然の美しさを表すカードで金子理事長の思いと願いを込めたメッセージを伝えた。

理事長のメッセージに対し、さまざまな方々から季節のご挨拶が届いた。その一部を紹介する。

コリン・パワー氏
（元ユネスコ事務次長・事務局長補）

金子様とノムラセンターの皆さまに新年のご挨拶を申し上げます。どうぞ、くれぐれもお元気で、そして素晴らしい活動をお続けくださいますように。

イエドラ・サストリー氏
（インドテレコミュニケーションズ）

ノムラセンターの皆さまにクリスマスと新年のご挨拶を申し上げます。我々の人間性に対する理事長のご考察と熱心なご活動は真に価値あるものだと思います。近い将来、再び協力していかれることを願い、人々が安心して住める世界を作るあなた様のご努力の一端を担えるよう、私自身も強さと健康をと願います。

アマル・アブゥ・エマラ女史
（パレスチナ支部責任者）

新年を迎えるに当たり、この一年何を見、何を学んだかをふり返りました。人々が家族や環境の大切さにより気づくようになってきていることを願います。経済的な困難は今後も続くと思いますが、命があり健康でいることに感謝しています。幸福を願っても、物質的な所有欲や外側からの刺激に左右されることはなくなっています。

残念ながら、ガザでも新型ウイルスの感染者が何千人もでています。支援や物資の供給もほんの僅かで、人々は無力です。学校の新学期も始まらず、支部の活動も休止しています。でもガザのスタッフと常に連絡を取り合い、今後の展望を考え直していきます。私はまだ希望を持っています。

年長世代は、今、先の見えない未来に向かって進まざるを得ない若い世代を最大限支援することに力を注ぐ時だと思います。私たちは暗闇の中の光になれるのです。このウイルスは不意に襲ってきたのですから、この苦難からの解放と安堵もまた素早く突然に来ることを信じます。私は常に前向きに、信じる気持ちを強く持つように人々を勇気づけたいと思います。

マリア・ツォンコバ女史
（ブルガリア支部責任者）

金子理事長の賢明な、勇気に溢れた新年のメッセージをありがとうございました。

二〇二一年が昨年よりも良い年となりますよう、そして互いに助け合うために一人ひとりが最善を尽くすことこそが、全体の改善に資することに、皆が気づくよう願います。それは創設者が喩えたように、人々の繋がりという大海に一滴を投じることになるからです。

人類が今学んでいる教訓が人々に届き、より分別を持ち、自己中心と強欲さが少しでもなくなりますように。

また、長い間連絡が取れずにいたパレスチナ西岸地区在住の男性からも「季節のご挨拶をうれしく拝見した」と近況を伝えるメールが届いた。